



華の碑文

杉本苑子

講談社

文 碑 の 華

了り
の
著者
により
止
印
検
解

◎ 杉本苑子 一九六四

昭和三十九年十一月十日 第一刷発行

三六〇円

著者 杉本苑子

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行者 野間省一

東京都文京区大塚坂下町二一四

印刷所 豊国印刷株式会社

東京都文京区音羽町三ノ一九

発行所 株式会社講談社

振替東京三九三〇
電話東京四二二二(大代表)

(大進堂製本)

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

華の碑文

カバー 唐織七宝つなぎ丸ずくし
装幀 吉田 幸子

庇が深く梁のひくい、まんぞくた調度ひとつ無いせい
か、しょっちゅう湿った、冷んやりした風が吹きぬけてい
る古家で私たちは生れ、兄の藤若は十二、私は八歳までこ
こに育った。

職掌がらこの家は、中ノ間とよばれるだだっ広い稽古場
が間どりの中心を占めており、中ノ間のうら手に、父と母
と私たち兄弟の住むふた間つづきの小部屋があった。

さすがにここだけは杉戸が立てられ、柵、納戸もしつら
えられていたが、中ノ間の東の出居にはしきりもなにもな
く、ひしぎげた衣裳葛籠や垢じみた積み夜具をさかいにし
て、座員とその家族たちの寝起きすがたがひと目で見わた
せた。

出居のすぐ下は厨土間だった。納屋を兼ねているので、
乱雑は出居に輪をかけていた。煮炊きの道具はもとより
臼、杵、箕、鋤鎌……荒壁にはくもの巣まみれの大笹だの
蓑笠のたぐいがさがり、根ッ株をたち割ったくつぬぎには
ちぎれ草履が散乱して、まっ屋間、へっつい廻りをねず

みが走りかわす盛況であった。

中ノ間の北側をかこっている薄暗い板敷きは、客人のた
めの寝泊り部屋——。いつ覗いても鉢たたきとか星占い、
歩き巫女、白拍子、曲舞々など、漂泊の旅芸人がごろごろ
していた。

彼らから、父はビタ銭一枚、泊り賃を取るわけではなか
ったし、逆に裨がゆのいっばいもふるまってやったから、
長雨にたたられる五、六月ごろなど、この部屋は旅籠さな
がらな混みようをみせた。うっかり踏み込もうものなら、
子づれの女盲が干し散らした襦袢に、顔をさかなでされる
おそれさえあった。

中ノ間を突きつて西の破れ縁に立つと、雑草だらけの
空地がひらけ、低い、くずれかかった土塀越しに、こくめ
いに耕やされた奈良盆地の風光と、生駒、葛城の山脈をな
がめることができた。

大和、結崎村——

私たち兄弟の父、結崎三郎清次は、この村に生活の本拠
を置く猿樂一座の座頭なのである。

南都興福寺の支配をうけ、春日神社の神事に奉仕するの
が父に課せられた表むきの仕事だが、もとよりわずかばか
りの禄米で、居候までかかえた大家族の日常をまかない切

れるものではない。

組立て舞台をかついで一座はひまさえあれば、近在近郷の祭祀目あてに巡業して廻った。伊賀、伊勢、河内、和泉、紀伊……。ときには遠く山陽道まで足をのばして、二ヵ月三ヵ月、結崎村の古家を留守にすることすらめづらしくなかった。

しかも、それでもなおくらしは苦しかった。母をはじめ座の女房どもは、寸暇を惜しんで葺^お績^うみの内職に精出していたし、兄の藤若は子方として家業の舞台に立つたわら、月のうち十日は、給仕勤めという名目で興福寺大乘院の支院の一つ、浄禪院の別当坊へ泊りにやらされていた。

僧兵あがりの別当は、五十がらみの獠^{どう}猛^{もう}な巨漢で、猿楽の座の者など、日ごろ、寺に飼われている奴僕^{ぬぼく}以下に見ている。村長や地頭どのにもました恐怖の対象として幼時、私の印象によく刻みこまれていたのは、この浄禪院の悪別当であった。

犠牲^{いけにえ}のいたいたしさを私は兄に感じ、坊へ出かけてゆく夕ぐれは、そのうしろ姿を、畏敬の思いで見送るのがつねだったが、つとめの内容については、

(ひどく辛いものらしい)

とだけしか、子供ごろに想像つかなかった。聞きほじるのは、なぜか憚られた。

報酬として、浄禪院から兄がたずさえてくる玄米^{くろいね}、古小袖、小豆などは、しかたしかに、一ツ時^{とき}、わが家の不届がちな家計をうるおした。

青ざめ汚れ、精も根もつかいはたしたような疲れきった表情で帰宅する兄を、母の玉苗^{たまなえ}がおろおろ出迎え、人が起き出す時刻というのに、ひと間だけ格子をおろした小暗い部屋に、これれもののように横にならせる……。日ごろ口やかましい父も、浄禪院からの朝ばかりは、だまって兄の屋寝を見すごすのが例になっていた。

兄の守人^{しうじん}である狂言師の大槌^{おうち}が、厨の土間で涙をこぼしながら、みやげの米を精^{しら}げている姿も、私はときおり見かけたものだ。

一種、陰湿な疑いと不安を、家族たちのこうしたそぶりのほしはしから、幼い私は敏感に感じとったが、さて、その自分の疑問を、父や母や大槌に、どう切り出してよいかなとなると言葉を知らなかった。まして兄の全身からは、浄禪院のつとめに関してはいっさい、何を問われても答えまいとする拒否の炎が、冷たく、かたくなに、燃えゆらいでいたように思う。

兄は美しい少年だった。気性もつよく、怜悧^{れんぎ}であった。しかしその美貌には、つねに暗鬱^{あんうつ}な翳^{かげ}りがつきまといいた。性格のつよさも、屈辱への反抗に根ざしていたようにう

ある。激発することを許されない反抗心は、表面、忍従というかたちをとりながら兄のなかで内攻し、その性格を、一見、細くはあるが鋼の糸に似た、強靱なものに仕あげたにちがいない。

貪婪、粗暴な僧兵相手の稚児づとめ——

十や十一の少年の柔かな肉体に、心に、それがどれほど無残な傷痕をのこすものであるか、今でこそ私も察しることができ。悪別当が、飽きるまで弄んだあと、こんどは待ちかまえていた僧兵どもが、かわるがわるその抑圧しきった獸欲を、一人の兄によって満たすしくみであつたらしい。淨禪院とはかぎらない。大寺の院坊にはそうした用を弁じる寺稚児が、きまって五人十人、養われていたが、僧兵どもの数にくらべると、圧倒的に彼らは少なく、また兄ほどの容姿と歌舞の素養を持つ少童はまれであつたのだ。

僧兵どもは兄を飽食したあとも、明けきるまでその華奢なからだをさいなみ遊んだ。ひとことも、兄は受けた恥辱と苦痛を家族に洩らしはしなかつたし、そうした変態的なさいなみも、稚児づとめにはつきものの責め苦なのだとあきらめて、家の者は目をつぶっていたようである。

ただ一度、兄が腕の骨を折り、首すじと手足に縄目の痕をつけたまま、ほとんど片息で、それも半裸に近いすがたで寺僕におおわれて帰宅したときには、

「殺す気か、こ、この、かよい者を……」

父は怒った。泣いてとめる母や大槌の手をふり切り、父は淨禪院へかけあいに行ったが、結局、その父も半死半生のめにあわされ、戸板に乘せられて、もどってくるほかない日常であつた。

侮辱にも蔑視にも、私たちには怒る権利などなかったのである。世間の人々はまた、私たちをいくら鞭打つても、一片の自責すら感じる必要はないのだ。私たち猿樂の徒は、普通人の目から見れば、どれほどすぐれた才能があり容姿を持っていたところで、彼らより一段劣る乞食非人——五カ所十座の唱門師の配下に属し、世間からはひとに『七道の者』といやしめられていた賤民にすぎないのだから……。むろん村方づき合ひもありせず、やむをえぬ用事で百姓衆の家へゆくときでも、母など、かならず憚かるように水屋口から出入りし、座敷へは通されも、通りもしなかつた。

絶えまない生活苦に加えて、こうした血の宿命が、重くのしかかっていた結崎村での毎日……。

当然、無気力な、希望を忘れた顔ばかりの寄り集りと思うだろうが、ふしぎにそのころ、結崎の古家には、暗くはあるが激しい熱情——充実感といったものが、すみずみにまでみなぎっていた。日常、子供の皮膚にさえ、家の中の

暗鬱な緊張は感じ取れたほどである。

（猿楽能の沈滞をうちやぶり、新工夫をこらした上で、何とか結崎座を都へ進出させたい。石にかじりついても今の惨めな生活からぬけ出したい）

との、座がしら清次の悲願を軸にして、熾火さながら燃え固まっている座員一人々々の執念が、その充実感の正体であった。

……目を閉じると私のまなうらには、ひと刷毛の雪景色が泛んでくる。生れ故郷ですごした最後の冬だ。村の子、座の子、十四、五人もが入りみだれて、組んずほぐれつ喧嘩をしている中に、チビの私もまじっていた。

仲間に入れてもらうことは貰えるが、座の子らはきまって不当なあしらいを受けた。毎言には慣れ切っているものの、三度に一度は喧嘩になった。

この日の原因は、雪合戦の泥玉である。於寿々という村方の女の兄の一人に、泥入りの雪玉が当たったことから、

「卑怯なまねするな座のやつら……。血のきたない者は、やることまできたないんだな」

村童側のガキ大将蜂丸と、

「もう一度言ってみろ。おれ達だという証拠があるのか」
兄とのあいだに口論がはじまり、ふたことみこと言い合

ったとみるまに、いきなり兄のほうから、年上の蜂丸になぐりかかったのだ。——たちまち乱闘になった。ところへ、誰が進出したのか、

「やめろ、やめろ」

蘭亭のおばが駆けつけて来た。於寿々の祖母である。

「泥玉作りの下手人は、ばばが見つけ出してやるわい」

子供らを一列に並ばせ、指先きをいちいちあらためたあげく、

「竹若ッ、お前じゃな」

黄ばんだ白眼で、おばは私を睨みつけた。

「手を見やい。お前の爪だけが泥だらけじゃ」

炯眼に、私はふるえ上り、的がそれたのだとしどろもどろ弁解しかけた。言いわけなどに、だが耳をかすおばではない。泣きじゃくっている孫を抱き上げると、

「おふくろに言うておけ。後刻かならず、小袖の掛け合いに行くから、とな」

吐きすてざま、帰しかけた。

蘭亭は奈良良いちばんの富商と噂される筆屋で、店は猿沢ノ池のほとりにある。ここ、大和の結崎村には田畑と別宅を持っているが、末むすめの於寿々が病弱なため、祖母がつきそって、保養に来ているさなかなのであった。もみじの繻をほどこした高価な於寿々の小袖が、袴の合せめか

ら胸へかけて、べっとり雪泥によごれているのを見て、
(どうしよう、償いをさせられる！)

私は泣き出した。

「藤ちゃん、竹ちゃん」

と、連れ去られながらも、於寿々は祖母の腕の中から半身を乗り出し、いっしん不乱な片ことで私たち兄弟へ呼びかけていた。

「心配しないでいいのよ。べべはまだ、うんとおうちにあるんですもの。ほんとよ」

かえろ、かえろとおばばの背について、蜂丸たちも立ち去ってしまった、夕近い雪の野ッ原には座の子供らだけがり残された。

「竹若のばかッ」

するどい、そのくせひそめた声で、兄は私をきめつけた。同時に右手がひらめき、私の頬ははげしく鳴った。あわてて、

「およしよぶつのは……。竹ちゃんはまだ小さいんだもの」

とめに入ったのは、大槌の子の小槌であつた。

「小さかない。七ツだ」

小槌の手を払いのけ、唇を慄わせて兄は私を難詰した。
「七つなら、していいことと、けっしてしてはならないこ

とのけじめぐらいつくはずなのに、竹はいつもずるをして座のものみんなに恥をかかすんだ。栗の籠を持たせればくすねるし、村の子のものときまつている毘沙門堂の柿を黙ってとるのも竹若じゃないか」

上眼使いに、私は相手の口許をぬすみ見た。兄の平手打ちには、骨組みの細さに似ぬ酷薄な力と、凄味が籠つてい、父の折檻にもました怖れを私に与えるのがつねだったが、恐怖と同量の奇妙な恍惚をも、責められているあいだじゅう私はきまつて味わわされた。なぜかわからない。とにかく幼時の私は、いつでも、どんなかたちでもいい、この兄にかまつてもらいたかった。そして、そのひそかな願望に抗し切れず、わざと兄を怒らせることまでしてのけたのである。

「藤若あ、竹若あ」

と、どこか遠くで、呼びかける声がこのとき聞えた。座の子らはいっせいにふり返った。くるぶしを埋める雪野原に葉を煮やしたものが、グイと裾をたくしあげ、いちめんの、その雪ときそうばかりな脛をあらわに、歩み寄ってくる女がある。

「お帰り、ごはんだよ」

……四、五日前から家に泊り込んでいる曲舞々の乙鶴であつた。

陽が落ちきるより早く、下のほうからじわじわと闇に吞まれてしまふ古屋敷——。逆光の中をあとになり先きになり、その軒目ざして馳けもどってゆく私たちの姿は、小さな蝙蝠の群れそっくりだったにちがいない。

井戸端には、狂言師の大槌が待ちうけてい、

「押すな押すな、順にじゃ」

釣瓶繩をきしませながら、洗足の水を汲んでくれる……。

雪の反射か、夕映えの影か、たらいの水は深紫に澄みきつて見え、足を漬けると湯みたいに温かった。

母は座員の女房たちにまじって炉鍋のまわりで立ち働いてい、灯を節約した家の中は、薪の煙でむせ返るほどだった。

床板に、じかに置かれている箸、めし椀……。他の子供たちとは別に、私たち兄弟は夕餉を中ノ間うらの小部屋でとるのである。

目の前は杉戸だが、その戸をへだてて、今宵も中ノ間からは、父の苛らだたしげな怒声が聞えていた。

「ちッ、また間がはずれた……どうしてこの、曲舞ぶしの調子がのみこめんのだ十二次郎」

「むりなんですよ。じたい……」

高弟の十二次郎もうるみ声で言い返している。

「小歌ぶしを基調にしている能音曲に、曲舞の調子を取り入れるなんて試みが、そもそも出来ない相談なんだ。水と油をまぜ合せるようなものですからね」

「黙れッ、工夫はおれがする。手付け通りに、貴様は鼓を入れればいいんだ」

「まあさ棟梁、……十二次郎も激さずに、いま一度さらってみようじゃございませぬか。短気は禁物じゃ」

辛抱づよくとりなしているのは、長老の牛太夫の声である。

干菜の煮びたしを、私はあじきない思いでつづいた。芸人としての飛躍を熱望し、ここ二、三年来、父がものに憑かれたように新音曲の工夫に没頭していることは、家中が知っていた。そして、その父に力を協せて、座員たちも刻苦している毎日のだが……。中ノ間からは、弾んだ掛け声がひびく日より、父の叱咤か、絶望的な呻きが洩れる日のほうがはるかに多かった。

棟梁の才能を信じ、その工夫の成就を、生きる目標でもあるかのように待ち望みながら、貧苦の朝夕に耐えている女子供の耳は、いきおい、中ノ間の気配に敏感になった。

（ああ、まだ駄目なのか……。新工夫とやらの目鼻は、ま

だつかないのか)

大家族の夕飯どきだというのに、出居でいも厨くもが、今宵もしんとなりをしずめて、齒の音もはばかるように、固い稗めしを噛み合っている……そんな中で、強しいてのように屈くたくなげにふるまっているのは、ひとり、客人の乙鶴であった。

「どう？ 汁の代りがあるけど飲むかい？」

声をかけながら彼女は小部屋へ入って来、そのまま勢いよく私たち兄弟の片わきへ坐り込んだ。給仕してくれるつもりらしい。

『加賀女座』とよぶ女ばかりの曲舞一座の、彼女は座長なのである。

住居は洛中ということだが、父とは仕事の上の友達だし、母の玉苗や座の宿老おぞらどもとも家族づきあいの氣やすきで、日ごろしげしげ出入りしていた。

年はそのころ、三十をひとつ二つ越していたろうか。ぬけるほど色じろな、むっちりした軀つき……、上背うしせもあり、当人はゆたかな髪と、張りのある眼を自慢しているが、むしろやや厚い、受け口ぎみの唇のへんに、濃艶ないろけを感じさせる女なのであった。

「氣をつけて聞いてごらん藤、今宵の清次どのの謡うたを……」と、中ノ間へ目くばせし、乙鶴は口せわしく兄にささや

いた。

「やっと『嵯峨物狂』のキリにかかったらしいよ」

「キリだって？」

兄は箸を置き、緊張したおももちで杉戸へ向き直った。

『嵯峨物狂』とは、父がその新しい着眼を盛り込み、工夫の粋を集めて試作しつつある新作能の題名であり、キリとは一曲の演出の、最終段階をさすことばであった。

「うんざりするほど長い生みの苦しみだったが、どうやらあとひと息で『嵯峨物狂』はできあがるらしいね。一作吹っ切れれば、二作め三作めはたやすいもの……」

おさえかねたような、乙鶴の氣息のはずみに、思わず私までが箸を投げ出して、

「お金持になれるの!？」

声をつつめかせた。

「大槌が言ってたよ。父さんの工夫さえ成就すれば、こんなボロ家とも稗めしともお別れだって」

乙鶴は笑った。

「そうさ。いっそくたびにはいかにいまでも、新しい能を幾つか薬籠中のものにした上で巡業に出れば、かならず結崎座の人氣はあがるよ。清次どのの腕前なら、田楽の牙城に斬り込むことだってまんざら夢じゃないと私は思う。賭けてもいいいね」

「一ほんとう？ 乙鶴さん」

半信半疑ながらも、そう聞かされると胸がおどった。

田楽に勝つ！

それはじつに、過去、半世紀もの長年月、猿楽なかまの口に、——子供らのあいだにすら、悲痛なひびきを籠めて呼びかわされてきた合言葉だったのである。

当時、大和には、父のひきいる結崎座のほかに円満井、外山、坂戸——三つの猿楽座があり、いずれも興福寺の庇護をうけて、春日神社の祭礼に奉仕していた。

このほか、近江に六座、宇治に四座、伊勢に三座、丹波摂津にもそれぞれ猿楽の座があるにはあったが、いずれも小さな地方劇団にすぎず、京洛の貴族や武家たちからは、田舎芸とひと口に卑しまれ、二流三流の名に甘んじていなければならぬ不遇な存在だった。

では同じころ、猿楽をおさえて、中央に覇をとなえていた芸能はなにかという……

それは、田楽であった。

足利氏が天下をにぎる以前、——鎌倉に、北条氏による幕府が経営されていたころから、田楽の能は貴顕紳士のひいきをうけ、彼らの心をしっかりとつかみつけてきた。

北条末代の執権高時が、魔魅にみいられたほどにも田楽

に嫉し、ついに社稷をうしなつた事實は、歴史のかたじけなさだし、あとをうけた足利氏も、初代尊氏、二代義詮、そしていま、三代義満公のみ代にいたるまで、田楽能を愛好すること北条氏にとらず、したがって公卿、諸大名まで、きそって田楽を後援し、猿楽の存在には一顧もくれぬ現状だったのである。

いっぽうは田植えのはげまし、いっぽうは寺社の法楽——。そもその発生こそちがえ、やがては入りまじり、ともにこの国の風土のなかに、根をはり葉をしげらせてきた二つの芸能……

ことにも猿楽、田楽の徒が、刃投げ、火渡り、高足、玉廻し——そうした幻術的、曲芸的なむかしながらの在り方からぬけ出して、『能』とよぶ歌舞演劇を、主な演目とするようになってからは、両者のけじめはまったく取れ、たがいに影響し合いみがき合いつつ、こんにちに至っているといえるのだ。

それなのに、なぜげんざい、猿楽は田楽に圧倒され、識者の批判から遠ざかって、田舎廻りをよぎなくされているかといえ、ここ五、六十年、田楽の役者に、本座の一忠・新座の喜阿弥……桃憐・紅憐・花夜叉など、あいついで名人上手が輩出しているのに反して、猿楽者のなかからは、わずかに大和結崎座の清次、近江比叡座の犬王しか

見るべきものが出ず、その二人とてまだ三十代、四十代そこそこ、近年ようやく人氣の出はじめた新進にすぎないからなのであった。

人材が少く、しかも芸の上では匂いと美を失って、泥くさいまま枯^こ渴^{かつ}しかけている猿樂の能……

(これではならぬ!)

と、奮起したのが父である。

生れつき、おのれにも他人にも厳しい人で、男性的なその風貌がしめす通り、くるしい戦いであればあるほど、意欲を燃やしてぶつかってゆく努力家なのだ。

『大衆の愛敬を以って、一座長久の寿福とする』

とは、つねづね父の言葉だし、なるほど芸人の足場というものは、見物の大多数を占める地方大衆の、愛と讃仰のうちにこそ築かれてしかるべきものかもしれないけれど、しかしそれだけではもの足りない、満足できない思いが、父はじめ心ある猿樂者のあいだには、当時、烈々と燃えだぎっていたのではあるまいか。

大衆の人氣をつかみ、これを支えとすることはもちろんだが、さらにその上に、少数識者の洗練された批評眼に身をさらし、真価をみとめられてはじめて、第一級の芸能たりうるのだ、と父は信じた。そして、

(何としても都へ打って出たい! 田楽を追い落とし、その

地位にとって代りたい!)

と熱望したが……

そのためにはまず、猿樂の短所欠点をたたきなおし、新鮮な魅力^{魅力}を吹き込んだ上で、武家貴族らのかたくな眼を、いやおうなくこちらへ、ねじ向けさせねばならなかった。彼らの興味、関心を、よびさまさねばならなかった。

……一座をあげての血のにじむような努力はこうして始まり、今なお執^{しつ}ねくつづいている。いや、乙鶴の言葉によれば、すでにその苦しみも、峠を越しつつあるというのだ。

(ほんとだろうか。ほんとにこんなくらしから、やがては抜け出せるのだろうか?)

柱によりかかって、食後のくせに満ち足りたことのない痩せ腹を、私は脛ごと抱えこんだ。七歳の童子には、出世にともなう富のほう^{ほう}が切実な関心事だった。小袖のつぐないなどにびくびくしないですむ生活、盗まなくても腹いっぱい、栗にしろ柿にしろが食えるくらしとはどういうことか……

——あわただしい足音がして、この時、小槌のつぶらな眼が敷居ぎわから覗いた。

「たいへんだよ竹ちゃんッ、蘭亭のおばが掛け合いに来たぜッ」

私はとびあがった。その裾をひつとらえて、

「何のことだい？ 竹、お言い」

乙鶴が追及してきた。やむをえない。逃げ腰のもつたて尻で、私は泥玉の一件を白状した。

「ふん、そんなことか」

乙鶴は宙を睨んだ。そのまま一、二瞬、おもくるしく黙り込んでいたが、いきなりこわい眼を、幼い三人の面上へ据えろと、

「聞いてみる、ほら、お前たち……あの清次どのの新工夫を」

境いの杉戸へ顎をしゃくった。

父と十二次郎の言い争いはいつのまにかやみ、中ノ間からは謡いと囃子の、白熱した音律が、家中の鬱気を押しつける勢いで、力づくで流れ出していた。新作『嵯峨物狂』全曲のうち、聞かせどころに据えられているクセの部分である。

「いままでの家の芸とはまるつきりちがうだろう？ 子供の耳にだって変りようはわかるはずだ、どうだい？」

その通りであった。これまで朝夕、聞き馴れてきた大和猿楽の音曲を、眠りゝにたとえれば、『嵯峨物狂』のそれはあざやかな眼醒めりだった。単調、たいくつな灰色から、ふくざつ華麗な光彩の譜に、このところ一歩々々、た

しかに結崎座の音曲は変身をとげつつあった。

「お前たちも知っての通り、今までの大和猿楽の音曲は煮すぎた餅だった」

と、いどみかかる口つきで乙鶴はつづけた。

「旋律の美しさばかりを大事がって、まのびのした歯切れのわるさに気づかなかった。清次どのはこの欠点を叩きなすために、能音曲の中に曲舞ふしをとり入れたんだ。猿楽な、まはもろん、田楽の座の者さえ思いもつかなかった音曲の立て直しに手を染めたんだよ。わかるか？ え？」

卑俗で単純なくぐつ女の手踊りではあったが、曲舞ふしの軽快さは、当時、巷の人氣をさらっていた。能音曲とはまったくちがって、曲舞のふし附けにはころよい刻みがあった。弾みがあった。調子もキビキビと早かった。

「お前たちの父さんはここに目をつけた。そして、まったく質の違う二つの音曲を溶け合そうと考えた。考えただけじゃない。ころみなんだ。あとひと息のところまで漕ぎつけたんだよ」

「わかってるッ、信じてるさ乙鶴さんッ」
にじりつけるように兄が応じた。

「父さんはいまにきつと出世する。そう、かたく、おれは信じてるよ」

「芸人というものは、芽が出ないうちは惨めだけど、いっ

たん認められれば公方さまのお側にだつてあがれるのだ」

と乙鶴の口ぶりにも、女とは思えぬ気迫があつた。

「肚の中はどうあれ、そうなれば村のやつらは、もはや口に出して、座の者を卑めることなど出来なくなる。……お前たち、海老名ノ南阿弥みなあみという人を知っているだろ」

「乙鶴さんの情人だ」

と、きまじめに兄がうけた。

「座員たちが噂していたことがあるよ。曲舞のふし作りでは、日本一の名人だつて……」

「その通りさ」

乙鶴はわるびれず、

「南阿弥どのはこの才ひとつで同朋衆に召し出され、京洛三条の將軍家御所につかえている。お前たちの父さんだつて、近く、きっとそうなる人だ。小袖なんぞにびくつくことはないんだよ」

「よしッ」

小槌は突ッ立った。

「おれ、蘭亭のおばばに言つてやるッ、一年待つてろッて。『うちの座がしらは新工夫をあみ出した。もうすぐ公方さまからお召しがくる。小袖の五枚や十枚、一年たつたら上臈の召し料と同じやつを返してやる』って」

「そうとも！ その時になつて目を廻すなつて、隠居のば

あ様とやらに念を押しておやり」

けしかけられて小槌は馳け去つた。その背について、私もちわがわ厨口へ出てみた。——あんのじょう於寿々の祖母は腹をかかえていた。

「あはは、あははは、一年待てば小袖を十枚返すと？

こ、この小槌めは、まむしの頭でも喰らいおつたか、らちくちもない広言をほざきおるわ」

あいだに立つて、母の玉苗は困惑しきつていた。盛りころは美しい人だったにちがいない。しかし今は生活に寝れて、肌など繭ごもりの蚕さながら、青白く透きとおつてしまつてゐる。幼時、あやまって炉に落ちたとかで、左のこめかみに薄い火傷の痕があり、そのためにもいつそう気弱く、影にばかりいたがる母なのであった。

三

「一作ふつ切ればあととはたやすい。もうひと踏んばり！」

と乙鶴は言つていたが、『嵯峨物狂』がまつたくの完成をみたのは、さらにそれから二ヵ月余の、生みの苦しみを経てのちだった。

つづいて、同じ意図のもとに『自然居士』『四位ノ少将』『葛の袴』など、十種あまりの新作がつくられ、座をあげての稽古がくり返された。あぐく、

(戦える！これならば……)

確信をつかむと同時に、父はほとんど、疾風といった行動を起した。一座を結集し、新猿樂の成果を問うべく地方巡業に出かけたのである。

母とともに、私は結崎村の家で留守をしていた。以下しばらくは成人ののち、牛太夫や十二次郎から聞かされた話の、引き写しであることをことわっておく。

地方の見物は当時、結崎座の能をそうと正しく呼ばずに、父の幼名観世丸にちなんで、

「かんぜの能、かんぜの能」

と愛称していたよしだが、ともあれ予想以上に、新らしい観世の能は人々を魅了したらしい。人氣は沸騰し、爆発的と評してもほめすぎではないとまで取り沙汰された。

曲舞を加味した新音曲は、わけて珍らしがられ口ずさまれて、はやくも国々に、流行のきざしさえ見せはじめたが……なぜか、それにもかかわらず、都人士のあいだに反響は起らなかった。洛中の大寺、大社から、「興行せよ」との呼びかけもいっこうに来なかった。

……むなしく年が明け、春がすぎた。

いたずらにただ、京の周辺を巡っているうちには、評判

を妬んだ田楽法師らの手で妨害が企まれるかもしれず、都入りの機会は失われる危険があった。

座員たちはあせったが、おそらく彼ら以上に、父はじりじりしていたことであろう。はげしい、きいっぽんな性格だし、誠心誠意やりはするが、それだけに自負もつよく、答えを求めるのに性急なところのある人なのである。

そんなさなか――

伊賀の上野で興行していた結崎座の楽屋口に、見知らぬ老人が刺を通じて来た。瘦せぎすで血色のよい、湯上り羅漢そっくりな僧形である。

「海老名ノ南阿弥という者だ。清次どのに御意得たいが……」

むぞうさな名乗りに、若い笛方の市菊が仰天して、

「あの、お、乙鶴ノ御の!?」

そのまま奥へすっとんだ。たちまち大さわぎになった。

装束替えさいちゅうの、素はだかに近いかつこうで父は楽屋口へ走り出て来た。

「棟梁どのか」

きびしく、しかし爽やかな眉で、南阿弥は呼びかけた。

「乙鶴から一度ぜひ、かんぜの能とやら見てやってくれとせがまっていたのでな。竹生島詣でを思い立ったついでに、廻り道覚悟で立ち寄ったのだ」